

2021年6月30日(水)

老球の細道617号

6月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

新型コロナワクチン接種、予約には膨大な手間ひまを要したが、接種はあっという間に2回終えることができた。もう恐れるものは何もない。各カテゴリーの大会も無事開催できなによりであった。コロナと五輪、感染症とスポーツがこれからの大きな課題となるだろう。

### 1・テレビから

◆「良い研究者になるには、運(幸運)、鈍(気にしない)、根(根気よくこだわる)」〈NHK・BS『HUMANIENCE IQの高さは天才を生むか?』〉:ある研究者がIQの高い人たちを数十年間追跡調査をしたら、その中からノーベル賞を受賞した人は皆無で、調査の対象にならなかった人たちの中から2人のノーベル賞受賞者が出たという。要は幼少期の才能よりもその後の本人の努力がものを言う。ちなみに「運」は努力し準備した人の後ろ髪を引く。

### 2・読書から

◆「真理を主張する人は独り善がりではいけない。だからといって、多数の支持を受けるものが真理であるわけではなく、又、どんな真理もまず個人の中に生まれ、公衆の反対に出会うのが普通であることも事実である」〈ヘーゲル『精神現象学I』鶏鳴双書〉:ヘーゲルの弁証法哲学について詳しく知りたくて読んでみたが難解であった。今までの自分の意識に対する矛盾(批判、反対、壁)と向き合い、折り合いをつけることで進歩は生まれる。

◆「スポーツは、より高い技術、よりよい成績を目指して努力し、自らの目標に達することに喜びがある。勝敗や結果は、新たな挑戦のスタートにすぎない」〈大野晃著『現代スポーツ批判』大修館書店〉:成功の哲学は皆同じである。最高の自分を目指す努力の過程に喜びと安堵感を見出すことである。負けること、失敗は、新たな課題を教えてくれる。

### 3・新聞から

◆「部分的とはいえ民主化を経験し、私たちは記者の仕事に誠実であるようにと教えられてきた。だからこそ、どれだけ弾圧されても記事が出ていない日は一日もないのです」〈朝日〉:ミャンマー国軍に批判的なメディアに対する弾圧の中、命をかけて国の実情を伝え続けるミャンマー記者の不屈の魂である。自分の人生を恥ずべきものにしたいくないと言う。国の施策を国民の立場で監視するのがジャーナリズムの重大な使命である。

◆「山ほどの好奇心を抱えて、その好奇心に導かれるままに仕事をしてきた」〈朝日:天声人語:立花隆〉:若き頃立花の著書はたくさん読んだ。その幅広いジャンルに渡る深い知性に圧倒された。その原動力が「好奇心」。目標は体力の三浦、知性の立花、美貌の郷ひろみ。

◆「スポーツのフェアプレイというのは、相手が先輩だろうが、忖度しないで、空気を読まないで、全力を尽くすことだと考えます」〈朝日:五輪はどこに:山口香(柔道家・JOC理事)〉:自身が五輪のメダリストでありながら、公然と現在の五輪、IOC、JOC、そしてスポーツ界の在り方を批判し続ける。このくらい「出過ぎた杭」になりたいものである。